

三帰依文

人身受け難し、今すでに受く。仏法聞き難し、今すでに聞く。

この身今生において度せずんば、さらにいづれの生においてかこの身を度せん。

大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、意上意を奏さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自から僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切意碍ならん。

意上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。

我いま見聞し受持することを得たり。

願わくは如来の真实義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏

インドにおける初期仏教の概要

過去七仏です、紀元前の人たちです、釈迦以前に六人の仏と言われる人がいました。

- 1) 毘婆尸仏(びばしぶつ)
- 2) 尸棄仏(しきぶつ)
- 3) 毘舍浮仏(びしゃふぶつ)
- 4) 俱留孫仏(くるそんぶつ)
- 5) 俱那含牟尼仏(くなくんむにぶつ)
- 6) 迦葉仏(かしょうぶつ)
- 7) 釈迦仏

皆様のご存知のように、「釈迦は、産まれた途端、七歩、歩いて右手で天を指し左手で地を指して「天上天下唯我独尊」と話した」と言い伝えられていますが、実はお釈迦様ではなく、過去七仏の**毘婆尸仏**の話であります。

1868年、イギリスの考古学者A・フェラー氏がネパール南部のバダリア（現在のルンビニー）で遺跡を発見しまして。そこで出土した石柱には、インド古代文字で、「アショーカ王が即位後20年を経て、自らここに来て祭り事を行った。ここでブツダ釈迦牟尼が誕生されたからである」と刻まれていた。この碑文（ひぶん）の存在で、釈迦の実在が史上初めて証明され、同時に、ここが**仏陀生誕の地**であることが判明するの
で有ります。

釈迦

釈迦は城主、シュッドーダナを父とし、マーヤーを母としてネパールのルンビニーで王子として生れガウタマ・シッダールタと名づけられました。

釈迦は、耶輸陀羅（やしよだら）と16歳で結婚し羅睺羅（らごら）が生まれています。（色々な説が有りますが、取り合えず、良し、としてください）

釈迦の悟りへの道

29歳の時に12月8日夜半に宮殿を抜け出て、かねてよりの念願の出家を果たします。

その後、三人の師に会います、最初は、バツカバ仙人を訪れ、その苦行を観察するも、死後に天上に生まれ変わることを最終的な目標としていた、六道に輪廻（りんえ）すると悟りました。

六道とは、天道・人間道・修羅道・畜生道・餓鬼道・地獄道、です。

次にアーラーラ・カーラーマを訪れ、空無辺処（くうむへんしよ）が、最高の悟りだと思い込んでいるが、それでは人の煩惱を救う事は出来ないことを悟りました。

次にウツダカラーマ・プッタを訪れたが、それも非想非非想処（ひそうひひそうしよ）（有頂天）を得るだけで、真の悟りを得る道ではないことを悟りました。

この三人の師は、釈迦が優れた資質であることを知り後継者にしたいと願うも、釈迦自身は、すべて悟りを得る道ではないとして辞し、その後、ウルヴェーラの林へ入る、王の父は釈迦の警護も兼ねて5人の沙門を同行させます、そして6年の間、苦行を積みました。減食、絶食等、座ろうとすれば後ろへ倒れ、立とうとすれば前に倒れるほど厳しい修行を行ったが、心身を極度に消耗するのみで、人生の苦を根本的

に解決することは、できないと悟って、難行苦行を捨てました、その際、この五比丘たちは釈迦が苦行に耐えられず修行を放棄したと思ひ、釈迦をおいて鹿野苑、(ろくやおん)へ去ったと言われています。そこで釈迦は、全く新たな独自の道を歩むことにしました。

35歳の時に、今迄の苦悩の悟りは、真の悟りでは無い事を知ると、村の娘、スジャータから乳がゆ、の布施を受け体力を快復し、ガヤー村のピッパラの樹(菩提樹)の下で、「悟りを得られなければ生きて、この座をたたない」という固い決意で瞑想に入りました。

釈迦の心を乱そうと悪魔たちが妨害に現れ、壮絶な戦闘が丸1日続いた末、これを、退け悟りを開くことが出来ました。これを「降魔(護摩)成道」という。また、ガヤー村は、仏陀の悟った場所という意味の、ブツダガヤと呼ばれるようになりました。(降魔(ごうま)とは、仏教においてマール(魔羅(まら)、天魔、悪魔)を降す(くだす)、事を言う)

釈迦は、そこに座わったまま、動かずに悟りの楽しみを味わい、縁起・十二因縁を悟った。その後28日の間に考えた末、この悟りを説いても世間の人々は悟りの境地を知ることにはできないだろうし、語ったところで徒労に終わるだけだろう、との結論に至ったところに、梵天が現れ衆生に説くよう繰り返し強く要請されました。

そして、釈迦は鹿野苑(ろくやおん)へ向かい、釈迦の警護の五比丘に初めて、その方法論、四諦・八正道を実践的に説きました。これを初転法輪(しょてんほうりん)言います、当時35歳でした。

五比丘(王の使いで釈迦の警護に当たった沙弥)は1、阿若(あにゃ)2、阿説示(あせつじ)3、摩訶摩男(まかまなん)4、婆提梨迦(ぼだりか)5、婆敷(ぼふ)は王が警護に付けた沙門の5人です。

舎城に入って、ビンビサーラ王との約束を果たし教化すると、王はこの事を喜び、竹林精舎を寄進しました。ほどなく釈迦のもとに二人のすぐれた弟子が現れる。その一人は知恵第一人者で舍利弗であり、もう一人は神通第一人者の目連でありました。

十代弟子

1. 舍利弗(しゃりほつ) 智慧第一。目連を連れて釈迦に弟子入りする。

『般若心経』では仏の説法の相手として登場。600巻に及ぶ『大般若波羅蜜多経』の心髓を治(おさ)むといわれています。

般若波羅蜜多経は中国では260文字にまとめたものである。日本では262字です。

2. 目連(もくれん) 神通第一(じんずうだいいち)。盆踊りは目連の母親が天へ昇る姿を現しています。

中国仏教では目連が餓鬼道に落ちた母を救うために行った供養が『盂蘭盆会』(うらぼんえ)の起源だとしている。現在でも、お盆の前に、盂蘭盆会として、ご自宅にお邪魔して、お参りさせていただく寺が、数多く有ります。

3. 摩訶迦葉(まかかしょう) 頭陀(ずだ)(衣食住に対する欲望を払いのけること)第一といわれ、衣食住にとらわれず、清貧(せいひん)の修行を行った。当時、彼は、結婚を攻められていたが、彼は工巧(こうこう)に金の美しい女人像を造らせて、これと同じならばその人と結婚しようと条件を出した、そして形だけの結婚をし、12年後に2人は出家した。王舎城とナーダダ村の間にある一本のニグロダ樹下に坐していた釈迦と出会い、そして、仏弟子となりました。

4. 須菩提(しゅぼだい) 釈迦の説法を聞き出家した。解空第一。また無諍第一、被供養第一とも称される。彼のために村人が、小屋を寄進したが、屋根が無い為に雨が降らなかったが、屋根を造ったら雨が降った。この話は、空を説く大乘經典にしばしば登場します。

5. 富楼那(ふるな)。釈迦の成道を聞き、波羅奈(パラナシー)国の鹿野苑(ろくやおん)へ同朋とおもむき仏弟子となりました。説法第一です。

6. 迦旃延(かせんねん)、仏や舍利弗、目連の滅後、教団の中心となってよく活躍したという。一度聞いた内容は忘れず、良く理解したと言われます。それでも難解で理解できないことがあり、釈迦に教えを請うことになり、これがきっかけで弟子となったとされる。

7. 阿那律 (あなりつ) 阿難と共に出家した。釈迦から「よくぞ釈迦族の高慢な心を滅した！」と参じたという。祇園精舎での釈迦の説法中に眠ってしまい叱責(しっせき)をうけ、眠らぬ誓いをたてたため、視力を失ったが、そのため、かえって真理を見る天眼を得ました。
8. 優波離 (うぱり) は、戒律をよく守り精通する事から、釈迦教団における規律は彼によって設けられたものが多いです。
9. 羅睺羅 (らごら) 釈迦の実子。釈迦の出家前に妊娠した子で5年後に生まれたと言われています。彼以外にも第一妃瞿夷 (ゴープーカー) との間の子で優波摩那(うはまな)、第三妃鹿野(かの)との間に善星 (ぜんしょう)という子供がいて、皆出家し仏の侍者となった、という説も有ります。
10. 阿難 (あなん) 多聞第一 (たもん・だいいち)。釈迦に女人の出家を認めさせた。釈迦の妃・耶輸陀羅 (やしよだら) の出家を認めさせた、釈迦の妃・耶輸陀羅 (やしよだら) は、尼僧の第一人者となる。出家して以来、釈迦が死ぬまで25年間、釈迦の付き人をしていた。弟子の中で教説を最も多く聞きよく記憶していたので「多聞第一」といわれます。提婆達多 (だいばだつた) の弟と言われています。

十六羅漢 (羅漢は悟りを開いた僧) (沙弥は修行中の僧)

- 1) 寶度羅跋囉情闍 (びんどらばらだーじゃ) 2) 迦諾迦伐蹉 (かなかぼつさ) 3) 迦諾迦跋釐墮闍 (かなかばりだじゃ)
- 4) 蘇頻陀 (すびんだ) 5) 諾距羅 (なこら) 6) 跋陀羅 (ぼだら) 7) 迦哩迦 (かりか) 8) 伐闍羅弗多羅 (ばじゃらぶたら)
- 9) 戎博迦 (じゅばか) 10) 半託迦 (はんたか) 11) 囉怛羅 (らごら) 12) 那伽犀那 (ながせな) 13) 因揭陀 (いんがだ)
- 14) 伐那婆斯 (ばなばす) 15) 阿氏多 (あじた) 16) 注荼半諾迦 (ちゆだはんたか)

五百羅漢 阿羅漢は仏弟子が到達する最高の階位とされる。小乗仏教では修行者の到達しうる最高の位とします。

アショーカ王 在位：紀元前 268 年頃 ~232 年頃、

生没は不明、インド、マガダ国の王で紀元前三世紀頃、初めてインドを統一。仏教に帰依し法 (ダルマ) を統治 (とうち) の理想 とし、それを各地の磨崖碑 (まがいひ) や石柱碑 (せきちゅうひ) に刻んだ。第三回結集を行なったと伝えられるルンビニーが、仏陀生誕の地であることが石柱碑 (せきちゅうひ) に記載されていました。アショーカ王は理想の帝王とされています。

アショーカ王と釈迦とのエピソード

ある日、釈迦が阿難を連れて王舎城に托鉢 (たくはつ) していると、ビンドゥサーラの子供の2人が砂遊びをしていた、一人は砂で餅を作り供養した、一人は合掌した、釈迦は阿難に『この童子は私が滅度して100年後に華氏城 (けしじょう) で転輪聖王 (てんりんじょうおう) になるであろう。姓は孔雀 (くじゃく)、名を阿育といい、仏の法をもって国を治め、8万4千の仏塔を建立して供養し衆生を安楽にするであろう』と言った。そして釈迦の入滅後立てられた8本の塔のうち7本から仏舍利を取り出して新たに建てた8万4千の塔に分納したと伝えられています。



デリーの鉄柱



柱上部 刻まれたサンスクリットの碑文



サルナートの石柱

デリーの鉄柱とはアショーカ王の建てられた柱の一つで、インド・デリー市郊外の世界遺産でクトゥブ・ミナール内にあり、錆びない鉄柱のことで紀元前250年頃の物です。

上海市内に静安寺の寺の入り口などサルナートの石柱に、似た塔が有ります。

又、寧波には、阿育王寺が有りますし、日本に渡航の際に743年第二次計画の時漂着した時に、鑑真が立ち

寄り休養した寺です。

中国における仏教の歴史。

阿育王寺 浙江省寧波市に有ります。(詳しくは、DVD に記載しています)



阿育王寺の石碑



大雄寶殿



本堂の壁に貼られた幾枚かの地獄絵図



鑑真大師造像



大雄寶殿内にはご本尊の三世仏



遣唐船のレプリカ

多数の中国の寺院を見学しましたが、**地獄絵図**を見たのは、阿育王寺だけです。

中国に仏教が伝わった原点は、シルクロードの商人が仏像を持ち込み、それから民衆の間に徐々に仏教が浸透していったものと推定されます。

仏教は月氏(げっし)を經由して東へと広まり、初めに中国西部の洛陽で実践された。明帝(めいてい)は、後漢の第2代皇帝(即位57年~75年)がインドの高僧、竺法蘭(じくほうらん)迦葉摩騰(かしょうまとう)らが、インドの僧が白馬に乗り『**四十二章経**』という**經典**を運んだ時に明帝の命により68年頃に白馬寺を建立しました。中国で**最初**に建立された**仏教寺院**であります。

中国の寺には、塔が有ります、塔は経蔵として建てられたものです。

中国の現在の寺院は、寺に入ると、まずは、正面に、弥勒菩薩像(布袋さん)が有ります、その裏堂には韋馱天(いだてん)がおります、境内に入ると、右に鐘楼、左に太鼓堂そして、正面には、大雄殿があります、これが中国の基本的な寺院の体系です。そして、不思議な事に、寺院には中国人の沢山の観光客がいて、大きく長い線香を持ち、東西南北に頭を幾度となくさげ、お参りしているようです。

楚王英(不明~71年)(そおうえい)

『**黄老の微言を誦し、浮屠の仁祀を尚ぶ**』(こうろうの、びげんをずし、ふとのにしを、たつとぶ)と記されています。

黄老とは、黄帝(中国古代の伝説上の王)と老子のことで、**不老長生を願う信仰**であったと考えられる。

中国の皇帝ではじめて仏教を信奉したのは後漢の桓帝(かんでい)(在位146~167年)であるが、桓帝も楚王英と同様、**仏陀と黄老とを合わせて祀り、不老長生の現世利益を願った。**

このように『**中国人は仏教を現世利益の神の一つとして受け取ったのであります。**』、現在の中国人の寺への考えが見れば、納得いきます。

中国の全体的に寺院は、観光化され、金儲け主義である。特に嵩山少林寺は、代表的で株式会社が成立するとの、うわさも有る位です。それが現在の中国人の考えである事を感じさせられる。**釈迦の教えとは、掛け離れた**

世界であるが、現在の日本に於いても、同様な世界に成りつつあります。

白馬寺 中国最古の寺 (詳しくはDVD に有ります)



白馬寺山門



大雄殿



白馬の石造



齊雲塔という 13 層の塔



迦葉摩騰と竺法蘭の墳墓



弘法大師空海像

竺法蘭(じくほうらん) 65 年頃 来中白馬寺中国に初めて仏教を伝えたといわれる伝説上の僧。

迦葉摩騰(かしょうまとう) 68 年頃 来中白馬寺

安世高(あんせいこう) 支婁迦讖(るかせん) の 2 人が中国に来て大乘經典を漢訳した。

安世高は 148 年頃の僧

イラン人 安息国(あんそくこく) の皇太子の位を捨て出家 中国で初めて仏教の經典を翻訳(ほんやく)した。白馬寺で四十二章經を訳写した。

支婁迦讖(るかせん) 149 年頃

インドの僧で初めて大乘經典を漢訳した。西域に渡来した訳経僧であり、月氏(げっし)の出身です。白馬寺で四十二章經を訳写した。

龍樹(龍猛) 150~250 頃

南インド仏教の僧で中国では、「大乘八宗の祖」で俱舍宗(くしゃしゅう)・成実宗(じょうじつしゅう)・律宗・法相宗・三論宗・華嚴宗の「南都六宗」に天台宗・真言宗の開祖とされています。

日本の八宗の祖で、天台宗・真言宗・浄土宗・浄土真宗本願寺派・真宗大谷派・臨濟宗・曹洞宗・日蓮宗です。

龍樹は、親鸞聖人が師としての七高僧で日本の大乘仏教の開祖です。

天性の才能に恵まれていた龍樹は、その学識をもって有名となった。龍樹は才能豊かな三人の友人を持っていたが、ある日、互いに相談して、学問の誉れ(ほまれ)は既に得たから、これからは快樂に尽くそうと決め、彼らは術師から隠れ身の、秘術(ひじゅつ)を得て、それを用以王宮にしばしば入り込みました、100 日間に、宮廷の美人は全て犯されたといわれています、妊娠する者さえ出てきたとのことです。

この事態に驚愕(きょうがく)した王臣(おうしん)たちは対策を練り、砂を門に巻き、その足跡をたよりに彼らを追った衛士(えいし)により三人の友人は切り殺されてしまったが、しかし、王の影に身を潜めた龍樹だけは惨殺(ざんさつ)をまぬがれ、その時、愛欲が苦悩と不幸の原因であることを悟り、もし宮廷から逃走する事が出来たならば出家しようと決心した。龍樹は若いときバラモン教を習い、欲望が苦のもとであることを悟り、欲愛を捨離(しゃり)して、ヒマラヤ山中に行き、出家しました。

大乘仏教運動を体系化し、大乘仏教の基盤となる『般若經』で強調された「空」を、無自性に基礎をおいた

「空」であると論じて**釈迦の縁起**を説明した。「**大乘八宗の祖**」です。

ある日、龍樹に、小乗の仏教者がいて、常に龍樹を憎んでいた者に、龍樹は彼らに、『お前は私が長生きするのは、うれしくないだろう』と尋ねると、彼らは、その通りだと答えた。龍樹はその後、静かな部屋に閉じこもりました、何日たっても出てこないため弟子が扉を破り部屋に入ると彼は既に息絶えていました。

提婆達多 (だいはだつた) 170~270 年

十代弟子の**阿難の兄**・王舎城では悪人であった。釈迦仏の弟子であったが、後に違背 (いはい) (命令にそむいた人) したとされる人である。**目連**は提婆達多の弟子たちにより**暗殺**されました。

秦氏 (はたうじし) 283 頃の人

渡来系氏族 百濟 (くだらから) の渡来層 日本へ渡ると初め豊前国 (ぶぜんのかくに) (福岡県東部) に入り拠点とした。各地に土着し、土木や養蚕 (ようさん)、織機などの技術を発揮して栄えさせた。

秦氏で最も有名な人物が秦河勝 (はたのかわかつ) である。彼は聖徳太子に仕え、南部七大寺を創建したことで知られています。(南部七大寺は東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、薬師寺、西大寺、法隆寺。)です。

538 年日本の仏教は、百濟国王の使いによって列島に仏教が伝えられた。それから二百年近く、仏教は朝廷や豪族、貴族の信仰を得て、確かな地位を築きました。

王羲之 (おうぎし) 303 年~361 年

政治家で書家であり、書聖と呼ばれていた。

王羲之は会稽 (かいけい) の地に赴任 (ふにん) すると、山水に恵まれた土地柄を気に入り、次第に**詩、酒、音楽**にふける清談 (せいだん) の風に染まっていて、ここを終焉 (しゅうえん) の地と定め、当地の名士たちとの交遊を楽しんでいた庭園が、**曲水宴**であります。(日本では 485 年に初めて始まりました)

曲水宴で楽しんでいた時の、書が有名な書、**蘭亭序**です。

王羲之の書が尊ばれる要因は、**王羲之の書の筆勢 (ひっせい) は、ひときわいせいが良く、『竜が天門をはねるが如く、虎が鳳闕 (ほうけつ) に臥 (ふ) すが如し』**であります。

また、『**蘭亭序**』は余りにも有名な書であり、**曲水宴**での作で、酔っ払って詩を書いたが、後で清書しようとしたが、何度書き直しても、此の書より良い物は書けなかったのです。



【之】の文字が 20 ヶ所、繰り返し登場する文字を、文脈に応じて違う形に書き分けた。所々で極端に太い字を書き、平板になりがちな全体の流れに絶妙な立体感を生み出した。一字一字の大きさを微妙に変えることで、不思議なリズム感を作った書です。

書聖と称されただけの事はあり、後世の書道界への影響は絶大であった。後の時代の書家は、ほぼ全員が王羲之を手本として、何らかの影響を受けたと言われている。そのため、「**書道を習う者はまず王羲之を学んでから他を学べ**」とさえ言われていました。

エピソードは

王羲之は手近な物に字を書いてしまう習性が有りました。

ある日のこと、酒屋で酒を買って帰る時に、店の主人が酒代を請求すると、王羲之は酒代の代わりに壁に文字を書いたという。主人がその文字を見ると「**金**」という文字であった。主人がその文字を薄く削って売ったところ、莫大な値になり、その主人はおかげでゆうふくになったという。

また、ある日のこと、王羲之が町の中を歩いていると、一人の老婆が扇を売っており、彼は売っている扇の何本かに五文字を書いたところ、老婆は「どうしてくれる」怒りせまった。すると彼は「『これは王羲之という人が書いたものです』と言って売れば、少し高くいっても、きっと買ってくれます」と言って、その場を立ち去っていった。数日後、同じ場所を通ると、先日の老婆が彼を見つけて、「今日はこの扇に全部書

いてください」と頼んだのだが、彼はただ微笑みただけで、そのまま立ち去っていったという。

王羲之が**鸞鳥**(がちょう)が、ほしくて**道德經一卷**を書きあげたなどなど・・・エピソードは多彩です。**王献之**(おうけんし)は王羲之の7目の子供で、書の大家で、書の特徴の一つとして**一筆書**(いっぴつしょ)の筆づかいで続け書き特徴であります。

王献之のエピソード

ある日のこと、献之が、書の、練習していると、後ろから父の羲之が近づいてきて、彼の手から筆を引こうとした時、「お前は筆をしっかりと強く握って書いている。きっと上手くなるだろう」と言ったという。ある時、父の羲之が都に出る時、父は壁に文字を書いていった。これを献之はきれいに拭き取って、自分のものと入れ変え、父より上手いと思っていたが、やがて、都から帰ってきた父が、ふと壁の文字を見て、「先日、都へ出かける時は、よほど酒に酔っていたらしい。どうもこの字は下手くそだ。どうしてこんな、きたない字を書いたのだろう。」と言い、献之は父が、なげくのを見て、ひどく恥ずかしく思ったという。鑿真が来日の時、**王羲之**と**王献之**の2人の書物を日本に持参しています。

曲水の宴は、**鹿児島**の**磯公園**でも現在も同じ様な交遊を楽しむ会が、毎年行われています。

仙巖園(せんがんえん)では昭和34年に曲水の庭が**発掘**され、これは第21代薩摩藩主**島津吉貴**(よしたか)が1736年、中国浙江省紹興市蘭渚(らんしょ)にあった王羲之の別邸、蘭亭を意識して作庭されたものと言われる。

平成4年から、**曲水宴**を行うようになった。**仙巖園**は薩摩藩主**島津氏**の別邸跡とその庭園。別名**磯庭園**(いそていえん)です。敷地面積は約5ha有ります。

王羲之・王献之の書法は**空海**を通じて、日本の書にも大きな影響を与え、その根幹の一つとなっている。同じく**最澄**も影響を受けていた。

天親菩薩 310～480 頃

七高層の二祖 『浄土論』では**浄土三部経**を論じています。兄の**無著**(むちゃく)から大乘仏教を進められ、下らない教義を聞いていたと自らの耳をそいで、**瑜伽行唯識学派**(ゆがぎょうゆいしきがくは)に入ったと言われています。その後、唯識思想を学び体制化することに努めました。

釈 道安 314～385

鳩摩羅什を中国に招くように**苻堅**(ふけん)(当時の王)に言った。

釈道安の功績は、**仏**(ブツダ)・**法**(ダンマ)・**僧**(サンガ)の**三宝**にすべてがわたっている。**三帰依文**です。**道安**は**法名**もしくは**戒名**を付けてもらう決まりとしました。現在まで伝わっている、**釈・釈尼**が在家の姓を捨てて、出家者はすべてそうです。**浄土真宗・浄土真宗**では**法名**と言います。

「**帰敬式**」とは、心身あげて真宗の教えに帰依し**釈尊**のお弟子となることを誓う事であります。

鳩摩羅什 344～413

龜茲国(きじこく)西域の僧で **玄奘**(602)と共に**二大訳聖**です、**真諦**(しんたい)(499)と**不空金剛**(ふくうこんごう)(705)を含めて**四大訳経家**で**三論宗・成実宗**の基礎を築きます。

王女を妻とするように強要されました。門弟(もんてい)は三千余人いたと言われています。死後に**火葬**しても舌が**燃えずに残るだろう**と言い残したが、**実際に舌が灰にならなかった**という逸話が伝わっている。

達磨大師 (382～532)

ペルシア生まれ・**禅宗**の開祖です。国王の第三王子として生まれ・**海**の**シルクロード**で**479年**に中国に來中して**広州**の**華林禪寺**を建立・**釈迦**から数えて**28代目**です。**嵩山**(すうざん) **少林寺**において壁に向かって**9年坐禪**を続けたのを**壁觀婆羅門**(へきかんばらもん)と呼んだ。「**壁のように動ぜぬ境地で真理を観ずる禪**」の事です。

第一祖は、**釈尊**からじきじきに法を継いだ、十代弟子の**摩訶迦葉**(まかかしょう)から**第二十七祖**の**般若多羅尊者**(はんによたら・そんじゃ)に継いで**28目**です。遺体は**熊耳山**(ゆうじさん)に葬られ、**塔**を**定林寺**に建てました。

華林禪寺 (詳しくはDVDに有ります)

広州市内に有る。創建は西暦**526年**インドから達磨大師が海のシルクロードを超え広州にやってきた際に創建された寺。広州の町の中心部に在り、全体の建物が密集した寺で中国では珍しいです。



山門は小さく素朴な山門



門を潜ると直ぐに達磨大師像



狭い境内に石塔



五百羅漢堂には所狭しと、おいでになる。

達磨大師像



達磨大師像 一花五葉の文字

華林寺には一華五葉は「心の華を開けよ」記されています。意味は、

- 1・純粹で清らかな相手の心をありのまま受け取れる円満な智慧。
- 2・差別の意識を捨て、平等に拝(おが)める智慧。
- 3・差別でなく、平等の中での区別がこまやかに、確かに観察できる智慧。
- 4・他の人々のために行動できる智慧。
- 5・この世界は皆、仏の心の現われだと受け入れる素直な智慧。

何故か、華林寺の達磨大師像の額の文字は一花五葉であり、中国ならば花ではなく『華』であるはずですが、もしかして、日本の方が何かに協力したのではないかと思います ?

嵩山少林寺 (すうざん) (詳しくはDVDに有ります)

中国の河南省鄭州市登封(ていしゅうし、とうほう)にある。中岳嵩山の中の北麓(ほくろく)にある寺で、嵩山は中国五岳のひとつに数えられています。

495年にインド僧・跋陀三蔵(ぼつたら)が建立し、その寺は「少室山ふもとの叢林(そうりん)の地」という位置にちなんで、「少林寺」と名づけられて、禅の発祥の地と伝えられる。

達磨がこの寺で面壁九年に及び座禅した。



石で出来た少林寺の門



寺の山門



少林寺拳法銅像



達磨大師像



少林寺初代住職の墓



達磨大師の石像

中国五台靈山

- 1) 五台山・文殊菩薩 2) 峨嵋山・普賢菩薩 3) 九華山・地藏菩薩 4) 普陀山・観音菩薩 慧尊 (えがく)
5) 天台山・天台宗 天台智顛

慧可(えか) 487~593 禅宗二祖

嵩山の少林寺で面壁していた達磨大師に弟子入りを願い出た。達磨は断つたが慧可はあきらめず、雪の降る中で、自らの腕を切り落として弟子入りの願い、弟子となった。雪中断臂 (せっちゅうだんひ) と言われます、そして二祖となった。

禅宗は禅の正系を強く結びつける上でも重要視されるのが、三祖僧璨(そうさん)である。道信に衣鉢が渡り四祖となる、その時の偈が『花の種、これ田地 田畑 (でんちでんばた) にて 瑞々しい (みずみず) 若花を大地より生ずる。もし、種をまく者がいなければ、花々に満ちていた大地は生じることもなく尽きてしまう』。『仏法もまた同じで、いまこそ 法をひろめなければならない。』と言われました。

光孝寺 (詳しくは DVD に有ります)

広州市内 五祖弘忍から慧能に衣鉢を与えられ受け継いだ寺 767年。南北朝時代にはインドの高僧、智葉三蔵が訪れ (502年)、菩提樹を植えました。

六祖慧能は、この寺の菩提樹の下で剃髪 (ていはつ) して僧となりました。

749年、唐の高僧鑑真は日本への5度目の渡航に失敗して海南島に漂着し、海南島大雲寺で、一春を過ごした後に広州の光孝寺に立ち寄っています。



光孝寺の大雄宝殿



智葉三蔵が 502 年植えた菩提樹



慧能の銅像

五祖弘忍(こうにん) 602~675

優秀な神秀 (じんしゅう) では無く、米つき男で慧能に達磨大師から受継がれている、衣鉢を渡し、六祖を慧能に託した寺が光孝寺です。

伝説では、弘忍は悟りの心境をうまく詩に表せた者を後継者と認めようと言い、当初、弘忍門下筆頭だった神秀が壁に偈を書いたが、弘忍は認めず、それを聞いた慧能が神秀の詩を否定するような詩を書き、それを弘忍が認めたので六祖となったという。光孝寺における最も有名な伝説は、六祖慧能がこの寺で「風幡 (ふうばん) 問答」を行い、南宗禅の開祖となったことである。

「風幡問答」

神秀の偈 身是菩提樹 心如明鏡臺 時時勤佛拭 莫使有塵埃

日本語の意味は、「我が身は悟りの樹、心は明鏡 (みょうきょう) の台のようなもの。たえず努力して、

鏡を磨いて塵埃（じんあい）を残してはならぬ。」

慧能の偈 菩提本無樹，明鏡亦非臺 佛性常清淨 何處有塵埃 心是菩提樹 身為明鏡臺
明鏡本清淨 何處染塵埃

日本語の意味は、「悟りに樹などはない。明鏡（めいきょう）も、また台もない。仏性は常に清らかだ。どこにも塵埃（じんあい）の付きようがない。明鏡（みょうきょう）は本から清淨（しょうじょう）だ 何処が塵埃に染まるというのか」との問答で弘忍が慧能を六祖とした。

風幡問答「旗が動いている。」もう一人は、「いや、風が動いている。」と譲りません。そこへ違う人が現れて、「旗でも風でもない、あなた方の心が動いている」と言う解釈が一般的である。

六祖慧能(えのう) 638～713

北京の出・中国禅宗（南宗）。寺の仕事は、米つきの仕事であった。

慧能は6祖となつてのちに、弘忍の命令で達磨から受け継がれた衣鉢を持って大輿嶺（たいゆれい）まで逃げたところ、500人の僧が追ってきたが、法論（ほうろん）して負けて逆に弟子になった者も少なくない。

慧能に関連する主な寺は、光孝寺と南華寺です。

禅宗は、開祖達磨大師・二祖慧可・三祖僧粲、四祖道信・五祖弘忍・六祖慧能です。その後、神秀は北宗の開祖となり慧能は南宗の開祖となりました。

南華禅寺（詳しくはDVDに有ります）

広東（かんとん）省韶関（しょうかん）市 南宗の発祥の地 千五百年の歴史がある。南華寺は6世紀の中国の南北朝時代、インドの名僧がここに来られて、風水の良いところと思って、お寺を建てた。（インドの僧、智薬三蔵が創建したと思われる。光孝寺も同じです）

677年に慧能がこの寺に入って南宗禅を確立し36年間宣教（せんきょう）し、43人の弟子を育てました。その慧能の門下には曹洞宗・臨済宗・雲門宗・法眼宗・沩仰宗という五つの流派ができました。

この寺には3体のミイラが残されている。この中に六祖慧能も含まれており、中国に現存する最古のミイラと言われている。3体とも共通しているのが、死後もまもなく全身に漆を塗りかため、外見がほぼ生前の姿のまま残っている点です。

慧能のミイラも衣を着たまま全身に漆を塗ったようで、その上から法衣を着せています。これは日本のミイラには見られない特徴であります。

南華禅寺の山門には、正面に、弥勒菩薩で裏には韋駄天で両サイドには、四天王は剣・琵琶・傘・蛇四人です。その意味は「風調雨順」（ふうちょううじゅん）で、言い換えれば、必要な時に必要な量の雨と風だけが来るといことです。すなわち農業が基本の中国人の、豊作のためのお守りです。

釈迦が悟りを開いた時に、悟りを広めるよう進めたのが帝釈天（たいしゃくてん）梵天（ぼんてん）で四天王などを配下としている。そして、韋駄天は、捷疾鬼（しょうしつき）が仏舎利を奪って逃げ去った時、これを追って取り戻したという俗伝（ぞくでん）から、よく走る神であり、盗難よけの神として知られる。韋駄天が釈尊のために、方々（ふうぼう）を駆け巡って食物を集めたとの由来で「ごちそう」という言葉が出来た、とも言われる。

慧能は中国禅仏教の祖師として尊ばれていて、日本のすべての禅も皆、慧能の弟子から始まっている。

南華禅寺（詳しくはDVDに有ります）



南華禅寺豪華な山号額



広い境内に天王寶殿



大雄寶殿内には釈迦三尊



慧能の即身仏ガラスケースに入っている。蔵経閣の中には竹にかかれた般若心経。 ご厨子の慧能像

玄中寺 (詳しくは DVD に有ります)

中国の浄土教の発祥の地。曇鸞(どんらん)大師(476～542)によって建立されました。

曇鸞は、ここで浄土教の教学と実践を行い、道綽(どうしゃく) (562～645)、善導 (617～681)と教えが引き継がれ、涅槃・浄土の教えが広まりました。

その後、玄中寺は、長い間に興亡を繰り返し、清の時代には千仏殿を残して焼失し、その存在はいつの間にか忘れ去られてしまいました。

再発見されたのが 1920 年、日本の僧侶で常磐大定 (ときわだいじょう) が、玄中寺を探し求めていました時に、唐代に書かれた石碑を発見し玄中寺の存在が明らかになりました。その後、浄土宗・浄土真宗ともここを玄中寺と認め、法要を営み、中日の交流が始まりました。

日中戦争、中国から多数の人が日本に連行されて強制労働させられ、多くの病死者、事故死者を出したことは、日本の戦争責任を考える上で忘れてはならないことである。戦後、その反省に立って、大谷瑩潤(えいじゅん)氏が 1953 年 (昭和 28 年) には、真宗大谷派の僧侶らと日中戦争で日本に連行され現地で没した中国側の捕虜の遺骨の送還をすすめました。これはもちろん人道的な行為であるのだが、当時の冷戦の中では大変に勇気のいることでありました。

玄中寺における日本と中国の宗教者がつちかってきて、遺骨の返還が進められ玄中寺を舞台とした日中の友好が続いています。

曇鸞大師(476～542)

中国北部、五台山の近く雁門山 (がもんさん) の生まれ。はじめ、仏教研究を続けるためには先ず、長生きをしなければいけない、ということで仙術に親しんでいたが、北インドから来た菩提流支に会って、「少々長生きして何になる。すみやかに生死解脱 (げだつ) の法を求めよ。 限りない生命を得る、真の不死の書はこれだ。」と末法無仏の時代には、他力の信心による浄土往生による成仏以外にないと説いたもの・すべてが他力のはたらきであると明快に論証し『観無量寿経』を示され浄土教に帰依した。以降、天親 (300 年～400 年) の『浄土論』を解説した『浄土論註』を著す一方、中国の民衆に称名念仏の素晴らしさを説いた。

道綽禅師 (どうしゃくぜんじ) (562～645)

曇鸞大師没後 20 年、山西省太原市の近くで生まれた。玄中寺で、曇鸞大師の 碑文 (ひぶん) を目にし、大師が仙経を焼き捨てて浄土の教えに帰したことに強い衝撃を受けた。「釈尊が入滅してすでに千五百年、末法の今日、いかにして正しい悟りを完成させる修行ができようか。私も聖道(しょうどう)自力の道を投げすてて、浄土の他力の教えに帰依しよう。」と、それまで属していた涅槃集を離れ、玄中寺に移り住んで、念仏生活に入り、『安楽集』を著し国中に広めました。

善導大師 (617～681)

七高層の五祖 道綽が師泗州 (ししゅう) (現在の安徽省) の生まれ。幼くして出家、三論宗に入り、『維摩経』や『法華経』を学んだ。しかし、末法の世にかなった法を求めななかで、玄中寺の道綽禅師に会い、弟子となる。

その後、善導は唐の都・長安に入り、光明寺に住んで、広く大衆に門戸を開き、念仏に勧めた。 群参するものすべての人々が、「長安城中、念仏に満つ」といわれるほどであった。『観経疏(かんぎょうしょ)』を著わし、これまでの『仏説観無量寿経』についての解釈を改め、念仏往生こそ末法悪世の人々のための仏の本

意であることを明らかにし、お念仏こそすべての人々が救われる。浄土宗は「阿弥陀仏」に悲願を一身に託し、ひたすら念仏を唱えて死後の極楽往生を目指します。

「阿弥陀仏」というのは梵語で、無限の光明、無限の寿命、無限の智慧という意味です。

後に、法然上人が「万民救済」の道を求めて悩んでいる時に、善導大師が書かれた『観経疏』を読んで忽然として悟り、日本に初めて浄土宗を開創して、自らを罪深い凡夫と自覚している人々が、「他力・仏」により、見守られ生かされている有りがたさを、感謝する生き方を示したからです。

自らを罪深い凡人と自覚する人の多くは、政治・権力者ではなく、一般庶民でした。庶民の眼覚めにより、日本の文化環境は、大きく変わり始めました。

親鸞が師とした、七高層の雲鸞・道綽・善導大師が関った玄中寺である。(詳しくはDVDに有ります)



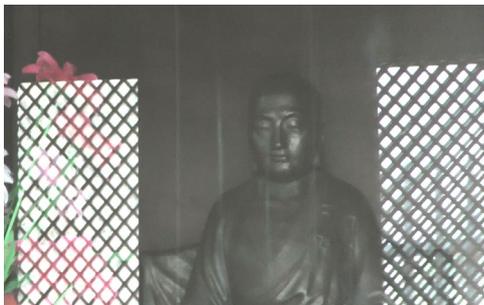
玄中寺入り口の山門



大雄宝殿



大雄宝殿の本尊・阿弥陀如来立像と白玉仏



善導像



雲鸞像



大谷瑩潤 (えいじゅん) 様の写真

香積寺 (浄土宗発源地) (詳しくはDVDに有ります)

西安の南約 17 キロの長安県神禾原にあります。

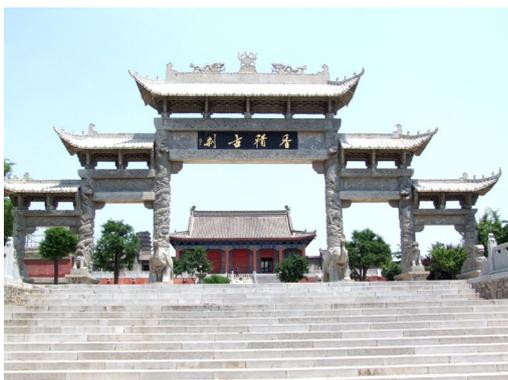
香積寺は仏教浄土宗の二世善導法師を祭るために建てたもので、境内には善導法師の舍利塔があります。

「天竺 (てんじく) に衆香の国あり、仏の名は香積なり」という伝承 (でんしょう) によって「香積寺」と名付けられた。現在残っている、唐の時代のものは、善導法師の舍利塔のみです。

法然上人は善導の継承者として「三国七高祖」の一人です。

浄土真宗の七高層は親鸞聖人が師とした7人の高層 龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、法然である。

法然によって、香積寺は日本の浄土宗の信者の発祥地となり、日中両国友好の絆としての役割も果たしています。



全体が石造りの立派な山門



大きな大雄宝殿



善導大師の舍利塔



善導大師



法然上人



宗祖法然上人 800 年大遠忌碑

天台山

天台宗の発祥の地 中国浙江省東部の天台県の北方 2km にある霊山である。華頂峰は標高 1,138m。洞栢峰・仏隴峰・赤城峰・瀑布峰などの峰々が存在する。中国三大霊山で五台山・峨嵋山（がびざん）・天台山です。238～251 年に仏教寺院が建立された、という伝承がある。支遁（しとん）や曇光（どんこう）、竺曇猷（じくどんゆう）らの僧が、この山中に住しました。また、後漢のころから道教の聖地ともされていました。

法華経を根本經典とした中国天台宗の実質的な開祖智顛、ゆかりの地として、国清寺があります。

当山の寺院は、国清寺・大慈寺・天封寺・真覚寺・方広寺・高明寺・華頂寺など殿堂など、家屋数は 600 軒以上の大寺院であります。総面積 7.3ha,

永福禅寺の福住職の悟灯（ウエ・デン）さんに案内されました、悟灯さんは、ここで出家したとの事。

悟灯さんは、現在は大谷大学の大学院の学生で博士号を取得のため、勉学に励んでいます。

国清寺（詳しくは DVD に有ります）



素朴な山門



隋代古刹（ずいだいこさつ）



国清寺の入り口



大雄宝殿



薬師殿



日蓮上人の書の石碑



王羲之の書の石碑

古方広寺(こほうこうじ) 天台山の標高 1,138m の頂上より少し下った所にある。



古方広寺(こほうこうじ)



釈迦如来、迦葉、阿難



白玉仏



悟灯さんの、弟子のお二人で



石梁瀑布(せきりょうばくふ) 滝。

天台宗は妙法蓮華經(法華經)を根本經典とする。開祖を龍樹・二祖慧文(えもん)・三祖慧思・四祖智顛・五祖章安灌頂(しょうあん かんじょう)・六祖湛然(たんねん)です。

慧思(えし)(515~577)

天台宗の二祖は、慧思の生まれ変わりが聖徳太子と言われている。天台宗は龍樹を開祖。慧思は、仏法の功德の一切全ては禪定(ぜんじょう)に従って生ずる・「一心」を契機(けいき)として坐禅の実習を強調しました。

智顛(ちぎ)538~597

湖南省生れ、中国天台宗四祖。法華經を根本經典としました。

智顛が575年からこの天台山に登って天台教学を確立した。601年ごろ天台山で、国清寺を修復して教団の生活規定を制定しました。

天台大師智顛は第四祖であるが実質的には天台宗開祖であるし、智者大師とも呼ばれている。日本の天台宗開祖である伝教大師最澄804年入唐している。円珍853年入唐も入唐しているし、栄西ほか多くの日本の僧侶がここを訪れている。日蓮聖人(1222~1282)の仏教へとつながります。

律宗と天台宗兼学の僧、鑑真和上が来日して天台宗関連の典籍(てんせき)を日本に運んでいます。

最澄(767~822)

19歳のとき東大寺で具足戒を受ける。桓武(かんむ)天皇の信任で、第十六次遣唐使は難波から出航しました。804年に空海の第一船と別の場所に漂着した。最澄は当初の目的を果たす為、ただちに天台山に向かい、受戒し国費を使つての經典など集め、湛然(たんねん)の弟子の道邃(どうすい)・行満(ぎょうまん)らに妙法蓮華經を根本經典とした天台学を学び、長安に入らず早々に帰国しました。最澄は804年7月寧波に着き805年5月19日帰国の途に付く。中国滞在はわずか10ヶ月間でした。

釈迦如来をご本尊とする。智顛の説を受け継ぎ法華經を中心としつつも、禪や戒、念仏、密教の要素も含みます、したがって比叡山延暦寺は四宗兼学の道場とも呼ばれている。

天台教学を受けて帰国し伝えたのが日本における天台宗のはじまりである。

最澄は天台仏教の完成を見ることの無く56歳で亡くなります。

最澄は王羲之の十七帖、王献之、欧陽詢(おうよう じゅん) 褚遂良(ちょ すいりょう)などの書家の書籍や法帖類を持ち帰っています。

空海 774～853 （日本では私度僧で有った）

長安・青龍寺の密教の七祖恵果（けいか）和上は密教の正統後継者である阿闍梨（あじり）の地位にありました恵果に会いに行く。

恵果（けいか）は空海を見るなり、空海に「自分は寿命が尽きようとしている。しかし法を伝える人がいなかった。さっそくあなたに伝えたい。」と言い、全身でよろこびを示し、初対面の空海になんと全てを伝えようと、言い放ったのでした。

恵果は空海に出会って一月も経たないうちに、最初の灌頂（かんじょう）を行い、わずか2ヵ月後の8月にはついに密教最高位の法王（大日如来）を意味する阿闍梨位（あじりい）を譲り渡す、伝法灌頂（でんぼうかんじょう）（密教独特の法の伝授の儀式）を行いました。実はこのとき恵果は病の床にあり、その年の805年12月15日にその生涯を閉じました。恵果は遺言で空海に、「請う、本郷に帰って、海内に流転すべし……今すなわち授法のあるなり」と言いました。この恵果の遺言を受け止め、空海は日本帰国を決意した。

20年の留学期間を投げ出して、わずか2年で「国禁」を犯してまで帰国するのです。

空海は長安で二年間、真言密教を中心に、儒教、道教、医学、土木技術や薬学、音楽及び料理などの知識を勉強して身につけ経典などを収集し806年に帰国した。

帰国後、2年間は大宰府・観世音寺に止住している。空海が帰国後に政府は、809年ついに「京にのぼれ」と空海に勅令（ちよくれい）が来ます。

空海は高野山に金剛峰寺（こんごうぶじ）を建立して真言宗を確立しました。816年事です

823年に嵯峨天皇は空海に東寺を与えます。真言密教の道場となりました。

「満濃池」は、空海が修築した日本最大の農業用のため池（香川県）です。各地に温泉にも空海の伝説があります。「立体曼荼羅」は空海のメッセージで作られています。

最澄からの理趣釈経（りしゅきょう）の借覧（しゃくらん）の要請をしたが、空海が拒絶したことや、最澄の弟子泰範（たいはん）が空海の下へ走った事などにより最澄と訣別となりました。

空海の真言宗の密教を東密と呼び、大日如来を本尊としている。最澄は阿弥陀如来を本尊とした天台宗で、台密で、平安京をはさんで、東西に、比叡山の最澄、高雄山の空海と平安仏教の二大リーダーが並び立ちました。

『空海が不空金剛（ふくうこんごう）（705年）の生まれ変わり』と言われていています。不空金剛は中国四大訳経家の1人です。

空海が仏教以外にもたらした物

1) 平仮名 2) いろは歌 3) 灸、もぐさ・中国医学・モンゴル医学・チベット医学。4) 讃岐うどん 5) 手こね寿司 6) 九条葱 7) エツ（魚） 8) 水銀鉦脈の発見。

西アジアで栽培化され始めた小麦はシルクロードを通過して中国へ伝わり、麺として中国の黄河流域からアジアの各地へ、そして空海が唐から高雄山にうどんの製法を持ち帰り、貧しい地元の民を救いました、事から現在の讃岐うどんがある。（讃岐うどんは、素朴なうどんである）

日本の歴史で弘法大師は三筆と尊称されています。漢字の草書体を利用してひらがなを作ったとも言われています。

ことわざ

「弘法も筆の誤り」のことわざは、空海は天皇からの命を受け、大内裏応天門（だいだいり、おうてんもん）の額を書くことになったが、「応」の一番上の点を書き忘れてしまった。空海は、額を降ろさずに筆を投げつけて書き直したといわれている。現在残っているこのことわざの意味は「たとえ大人物であっても、誰にでも間違いはあるもの」ということだけであるが、本来は「さすが大師、書き直し方さえも常人とは違う」という、ほめ言葉の意味も含まれています。

「弘法筆を選ばず」文字を書くのが上手な人間は、筆の良し悪しを問わないと言う事言う事ですが、ただし、性霊集には、よい筆を使うことができなかつたので、うまく書けなかつた、という、全く逆の意味に言及

しています。「弘法筆を選ぶ」として、逆の意味のことわざとして用いられることもある。

「護摩の灰」弘法大師が焚いた護摩の灰と称する灰を、ご利益があるといって売りつける、旅の詐欺師をいう。後に転じて旅人の懐（ふところ）をねらう盗人全般を指すようになりました。

青龍寺（日本密宗発祥地）（詳しくはDVDに有ります）

創建は、582年、一度、廃寺となったが、662年再建された。

会昌（かいしょう）の廃仏（840年から846年武宗により行われた。）によって再び廃毀（はいせき）されたが1982年に、青龍寺であったことを確かめられた。

恵果は長安に居たインドの名僧、不空金剛の直弟子として、密教を学び、恵果は766年から、この寺に入山しました。

密教僧らが住持するようになり、入唐の留学僧たちとの関係が生まれました。日本の僧、天台宗の円仁・円行・円珍・宗睿（そうえい）らも青龍寺で恵果の密教を学んでいます。

四国四県と日本の真言宗の門徒衆は、1982年2月、青龍寺遺跡に空海記念碑が建立され、1984年に恵果・空海記念堂が再建されました。

青龍寺は四国八十八箇所霊場めぐりの出発点でもあります。



恵果・空海の記念堂



空海記念碑



恵可・空海の記念堂御内陣

慧慈（えじ）543～623

聖徳太子の師であり飛鳥時代に高句麗から渡来した僧で、推古天皇在位時代30年2月22日（622年4月8日）に厩戸皇子（うまやと）が没したという、ふ報を聞いて大いに悲しみ、同じ日に浄土で厩戸皇子と会うことを誓約して、言葉どおりに没したという。

聖徳太子(574～622)も鳩摩羅什訳の『妙法蓮華経』を読んで有名な『法華義疏（ほっけぎしょ）』を著作された。

小野妹子 580頃～650頃

天津市の豪族・607年聖徳太子が隋と国交するため、第1回遣隋使として来唐させる。

小野妹子のエピソード

- 1) 聖徳太子が四天王寺を建立の際に、寺の建立のための用材を求め、小野妹子とともに、この地を訪れた。その際、太子は池で沐浴（もくよく）をするため、木の枝の間に持仏の如意輪観音像（にょいりんかんのんぞう）、を置いていたところ、像は重くなり動かなくなってしまった。今後は、この地にとどまり衆生を悟りの境地に導くことにしたいと告げた。そこで太子は、この地に伽藍を建てることとした。杉の霊木のありかを教えてくれたので、その材を用いて六角形の堂を建立した。紫雲山頂法寺（しうんざん、ちょうほうじ）で通称『六角堂』で呼ばれている。頂法寺は京都市中京区にあり、聖徳太子の創建寺院の一つである。

親鸞は（1201年）29歳のとき、六角堂で100日参籠（さんろう）し、聖徳太子の四句の偈文から、救世菩薩（ぐぜぼさつ）の化身（けしん）から夢告（むこく）を受けました、その後、吉水に法然を訪ね、専修念仏に帰依し、その教えを受けて弟子となったという。

聖徳太子の命により小野妹子が入道し仏前に香花をそなえて供養したことが華道の由来とされ、その寺坊が池のほとりにあったことから「池坊」と呼ばれている。小野妹子は華道の祖とされている。又、この寺の執行（しゅ

ぎょう)の住む本坊を「池坊」と言われる。

- 2)何故、小野妹子の名の由来は「**従妹のコネにぶら下がるヒモ野郎**」と言われ、だらくが過ぎたために父から勘当されてしまい、放蕩(ほうとう)が過ぎ、あまりの恥ずかしさに名を春日と改めて持前の口八丁の才能をいかんなく発揮、大いに売り出し、敏達(びだつ)天皇に嫁いだ従妹のコネで遣隋使に採用され、鞍作福利(くらつくりのふくり)に随行して隋へと渡るが、重度の船酔いに苦しめられて、のたうち回ったあげく、翌年に医師である**裴世清**(はいせいせい)(医者)に連れられてどうにか生還(せいかん)することが出来た。幸か不幸か、これが日本に**当時の最新医療**をもたらすキッカケとなった。
- 3)小野妹子は、聖徳太子から頼まれていた隋の煬帝(ようてい)への国書を紛失してしまい、どうせ他人が持って行く文章だから、とばかりに適当なことを思い、自分で**文章をでっち上げる**ことにした。それが、歴史的に有名な「**世界一不屈な手紙**」である、その事により、日本は歴代中華王朝の柵封(さくほう)体制下から離脱を宣言してしまったのである。
- 4)小野妹子は、聖徳太子から「医療分野でお世話になった裴世清(はいせいせい)先生がお帰りだから、しっかり護衛するように。無事に送り届けたら、もうお前はいらぬから、そのまま帰って来なくていい。老後の面倒くらは世話してやる」と言われ、仕方なく再び隋へと渡り、せめて**平和な余生**を……と思っていた矢先に持病の船酔いが悪化、吐瀉物(としゃぶつ)をのどに詰まらせてそのまま死んだと言われている。

玄奘三蔵 602年～664年

法相宗の開祖・中国の訳経僧。鳩摩羅什と共に**二大訳聖**・629年に陸路でインドへ、645年に**經典** 657部や**佛像**等を持って帰還・**ナーランダ大学**(ナーランダー中部にある427年に建てられた世界最古の大学の1つ)では**戒賢**(かいけん)に師事して**唯識**を学び、弘福寺の翻経院(ほんきょういん)で翻訳の事業を開始した。事業の拠点は後に**大慈恩寺**に移った。**大慈恩寺**(だいじおんじ)に**大雁塔**(だいがんとう)が建立された。法相宗の実質的な創始者は玄奘の弟子の**基**(632～682年)である。

大慈恩寺 (詳しくはDVDに有ります)

シルクロードの出発点でもあり、西安市南東郊外約4kmにある仏教寺院であり、三蔵法師玄奘ゆかりの寺として知られる。648年、皇太子の李修が、亡き母(文徳皇后)のために建立したのが、大慈恩寺であります。



立派な山号額



玄宗三蔵舍利塔



經典が納められた塔

道昭(629～700年)

玄奘三蔵に教えを受け**法相教学**を学んだ。「**経論**は奥深く微妙で、究めつくすことは難しい。それよりお前は禅を学んで、東の国の日本に広めるのがよかろう」と禅の修行をすすめ、道昭はそれを守り、帰朝の際に玄奘から**舍利**と**経論**をさずけられました。日本で初めて**火葬**は、道昭です、道昭の遺言により火葬されました。

東大寺の「四聖」は、**聖武天皇** **良弁** **行基** **菩提僊那**(ぼだいせんな)です。

良弁(ろうべん)(689～773)

華嚴宗の僧 **東大寺大仏**建立の功績により**東大寺**の**初代別当**となった。**鑑真**とともに**大僧都**(だいそうづ)に任じられる。

行基(ぎょうき)(668～749)

奈良時代の高僧(道昭が師)**法相宗**。聖武天皇により奈良の大仏(東大寺など)建立の実質上の責任者とし

て招聘された。行基の指導により墾田（こんでん）の開発や社会事業が進展した。「行基菩薩」と言われます。行基は「文殊菩薩の化身」とも呼ばれていました。日本地図である「行基図」を作成しました。

菩提僊那（ぼだいせんな）704～760年

インドのバラモン階級 東大寺4聖で奈良時代の渡来僧 736年（天平8年）に栄叡・普照に来日をお願いされ、道璿・仏哲と共に先に来日した。

如宝（にょほう）680～740頃

律宗の渡来僧で下野薬師寺に住したが、唐招提寺に帰住し、伽藍造営に尽力した。東大寺 戒壇で受戒する。

道慈（どうじ）680 不明～744

遣唐使 大安寺建立 奈良時代の三論宗の僧で 702年入唐・西明寺に16年間住して三論に通じて、仁王般若経を講ずる。日本三論宗の第3伝とされる。遣唐使として43年ぶりに入唐を果たした。長安の西明寺に留まり16年間学びました。大安寺を作った。

道慈は、帰国後に唐と異なり教典に従っていないことが多い事に気づき、日本の仏教界を批判し、僧尼の質を向上させるために戒師を唐から招請することを提案した。鑑真の来日によって実現することになる。後に大安寺に住しました。

長屋王（ながやのおう）684～729

天武天皇の孫、鑑真の招致の時の鑑真の言葉で『長屋王は仏教を尊び、袈裟を千領作って、中国の僧に喜捨（きしゃ）した。』人で、鑑真が来日のきっかけとなった人物。

靈仙（りょうせん）759～824

法相宗の僧で、日本で唯一の三蔵法師・第18次遣唐使（804年）の一人最澄・空海らと同行、長安で学び810年には醴泉寺（れいせんじ）大元帥法の秘法を受ける便宜（べんぎ）を与えられる。淳和天皇（じゅんなてんのう）から渤海（ぼっかい）の僧の貞素（？）に託された黄金を受け取り、その返礼として仏舍利や経典を貞素に託して日本に届けさせた。一説によれば靈境寺の浴室院で毒殺されたという。

榮叡（ようえい）660～733年頃奈良時代の僧。美濃国の出身。興福寺に住して、法相教学を学ぶ。普照と共に唐に渡り道璿が鑑真に来日を要請した。鑑真の来日を見ず唐で入滅。

普照

思託

法然上人（1133～1212）七高層の七祖

親鸞聖人（1173～1236）